

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

横浜市立大学医学部消化器・腫瘍外科での国内外科研修を終えて

岐阜大学医学部消化器外科

洞口 岳

この度、日本臨床外科学会による若手外科医対象の2024年度国内研修制度に応募し、2025年1月20日～1月31日の2週間、国内留学の機会をいただきました。研修先として、臨床外科学会よりご提示いただいた数多くの素晴らしい病院の中から、横浜市立大学医学部消化器・腫瘍外科を希望させていただきました。

私は医師11年目であり、肝胆膵外科を志して3年半が経過しました。今回の外科研修は、これまでのキャリアの中でも特に刺激的で、学びの多い時間となりました。横浜市立大学医学部消化器・腫瘍外科での週3日の肝胆膵外科手術に加え、他病院での手術見学の機会も設けていただいたことで、研修期間のすべてを手術見学に捧げることができました。初日から膵頭十二指腸切除術に第2助手として参加させていただき、その後も毎日のように高度な手術を間近で体験させていただきました。

手術見学の際には、『自分であればどう対応するか』という視点を常に持ちながら臨むことを意識しました。しかしながら、実際には先生方の高度な知識と洗練された技術、手術戦略に圧倒されるばかりであり、それらを目に焼き付けることで精一杯でした。そして、この2週間は学んだことをその日のうちに文章とイラストに残すことを日課としました。

門脈浸潤を伴う膵癌や腫瘍径5 cm以上の膵頭部腫瘍など困難な症例が多く、アプローチの工夫や血管処理の巧みさ、特に門脈再建や剥離のスピードと正確性には感銘を受け、自身の技術向上への課題を明確にする機会となりました。

また、連日のチームカンファレンスと回診に参加させていただき、スタッフの間での徹底した情報共有とディスカッションの重要性を実感しました。術前プランニング、術後管理、患者ごとの最適な治療方針を議論する場面に立ち会い、多角的な視点から診療を考える機会をいただきました。

さらに、1週間のうち2日間、横浜市立大学附属市民総合医療センターと東京女子医科大学病院を訪問させていただきました。市民総合医療センターでは、腹腔鏡下肝切除・膵切除を見学させていただき、カメラワークやポート配置の工夫、組織の剥離層の捉え方など、腹腔鏡手術ならではの技術を非常に丁寧にご指導いただきました。東京女子医科大学病院では、国内外からの見学者が多く集まり、国際的な環境の中で手術を見学する機会をいただきました。術者と助手、看護師の連携が極めてスムーズであり、阿吽の呼吸で手術が滞りなく進行する様子には驚嘆しました。手術工程や再建の工夫など、是非取り入れさせていただきたいことばかりでした。

この2週間で各施設の先生方と意見交換を行い、異なる施設でのアプローチや手術の考え方を知ること、視野が一層広がりました。特に、術式の違いや器具の選択、周術期管理の細かな工夫を実際に目とすることで、これまで自分の知識の枠に囚われていた部分が大きく打ち破られたと感じました。

また、研修先の先生方が忙しい中にも関わらず、横浜市初心者の私を食事に誘ってくださり、リラックスした雰囲気の中で様々な話を伺うことができたことも、非常に貴重な経験でした。他県の先生方と繋がることができたことも、今後の私の肝胆膵外科医人生における大きな糧となると感じています。外科医としての生き方やキャリア形成に関するご助言もいただき、自分自身の今後の方向性についても深く考える機会となりました。

この研修を通じて、外科医としての更なる成長を強く実感すると共に、自身の未熟さも痛感しました。今後の目標として、より高度な技術・知識の習得だけでなく、肝胆膵外科医の繋がりを是非継続させたいと思っております。この素晴らしい研修制度が今後も継続され、より多くの外科医が他施設での学びの機会を得られることを願っています。

最後に、快く受け入れてくださった主任教授の遠藤 格先生をはじめ、窓口としてご尽力いただいた准教授の本間祐樹先生、そして肝胆膵チームの先生方、並びに多くのご指導を賜った横浜市立大学附属市民総合医療センター准教授の熊本宜文先生、東京女子医科大学病院消化器病センター肝胆膵外科学分野教授の本田五郎先生には心より感謝申し上げます。また今回、研修の機会をいただいた臨床外科学会並びに推薦をいただきました当科の松橋延壽教授、ご支援いただいた当医局の先生方にもこの場を借りて感謝申し上げます。

この研修で得た知識と経験を胸に刻み、今後の外科医人生に活かしていきたいと思います。



遠藤格先生と教授室にて



肝胆膵外科の先生方と